
Actor Actor

明日花

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A c t o r A c t o r

【Nコード】

N 8 5 0 4 N

【作者名】

明日花

【あらすじ】

ただ今、更新停止中につき、ご迷惑おかけいたします。

若手演技派俳優 皆瀬晴生はある作品をきっかけに人気タレント
咲良と出逢う。

14歳にしてあまりに出来上がった人格を持つ彼女に対して、関心を抱くようになった。

固いものがぶつかり合う音と共に「カット」がかかる。

もつとも皆瀬^{みなせ} 晴生^{はるき}にとつては眠りから覚まされるような瞬間だ。

「よかったよ」の言葉と共に、晴生と共にセットにたたずんでいた少女から何かが消えた気がした。

弱冠14歳という若さでありながら、今回共演相手となったこの少女は、ずば抜けた演技力と容姿で子役という領域から飛び出していた。儂げな容姿をよそに基盤となっている中身はものすごく気丈で強い。実際、自分がこの歳だった時とはありえないほどにかけ離れていると思う。

絶対に学年の大人っぽいと称されていた女子でもこれほどではなかった。

それが逆に怖くも感じる。

名前を、いや芸名『咲良』というその少女のことを晴生はそれまで全然と違っていいほど知らなかった。

いや、興味がなかったのだ。

彼自身、下積み十年近くを経て、ここ一、二年、ようやくという感じで月給制から歩合制へと変わったばかりなのだ。

元々舞台出身ではあるし、TVや映画にはここ近年出演するようになったのだから、知名度が上がり始めるのが遅かったのは仕様がな

いことではある。

それでも、事務所の人間達はやきもきしていたわけだし、晴生自身も焦りを感じないでもなかったのだ、今の状況はやっと手に入れたものではあった。

三十歳にして遅めのブレイクというところである。

別にアイドルを目指しているわけでもないのに、それでもかまわなかったのではあるが、若いうちに演じられるものもあるので、やは

りここらで一発売れて万々歳だった。

ただの演技馬鹿の晴生とは逆に『咲良』は、ドラマや映画、CM以外にもティーンズ向けのファッション誌でモデルなどもこなすという、いわゆるオールマイティーな売れっ子である。

正直言うと晴生自身は彼女のような年頃の女の子が何を考えているのかなど、てんで想像もつかないという理由で今回の映画にあまり乗り気になれないでいた。

それでもこの仕事を請けたのには、ストーリー、監督ともに魅力があったからに他ならない。

あらずじは人生に迷った男が、両親を亡くした姪っ子を引き取らざるを得なくなり、共に過ごすうちに何かに気付き始めるというのんびりしたものだ。

邦画にありがちなゆっくりとしたこの設定は彼にとって、心惹かれた。

請けてから咲良という少女とどう接するかで焦ったというだけの話だ。

きつと売れっ子のそんな年頃の娘など、ものすごく我侘なマセ餓鬼に違いないと踏んでいた。

ところが、だ。

実際、接してみた彼女は一切その予想をはずしていた。

礼儀正しく、謙虚で物静か。

それでいてもものすごく自分の仕事にプライドを持って取り組んでいる努力家。

ちよつとなないほどマイナス評価の無い少女だった。

周りとの接し方を傍から見ていた彼は、咲良の大人振りに舌を巻いた。

ガキンちよの接し方以上に、こんな大人子供に接する方法なんて知りえない。

晴生は当惑した。

何せ普段の態度は勿論のこと、演技まで大人と同じような思考パタ

ーンの完璧な役作りだったのだから。

「皆瀬さん、お疲れ様です」

思春期特有の高い少女の声が晴生にかかる。

後ろを振り返れば件の少女・咲良が立っていた。

少し顔を微笑む形に変えて「お疲れ様」と返す。彼は『笑顔』の演技が特に得意だった。

世間では“笑顔の貴公子”などと称されている。

「皆瀬さんと今回一緒にできて、すごく勉強になります！」

私、お芝居を勉強する機会が限られているので、ほとんどぶっつけ本番になってしまふのですけれど・・・。

皆瀬さんの役作りの仕方とか、見ていて本当に為になるなって感動しっぱなしなんです！」

あながちお世辞と言うわけでもない様子が、彼女の息巻く興奮具合で伝わってくる。

そう悪い気分ではない。

しかし、何て子供離れした言葉遣いなのだろうか。

改めて晴生は感心した。

ふと、気がついた。

リハーサルと本番以外でこんなに近くで咲良に接するのは初めてかもしれない。

晴生自身、あまり積極的なタイプではないが、ここまで共演者、しかも最も共演シーンの多い相手役と関ろうとしなかったことは今まで一度たりともなかった。

大人げ無かった自分の対応に、今更ながら深く後悔した。いや、反省した。

本来なら、年上の自分から咲良に親睦しんぼくを深めるための手を差し伸べ

るべきではなかったか。

それを、彼女から差し伸べてくるまで全く動こうとしないという駄目な大人っぷりに自分でも自分にがっかりした。

咲良はいえ、積極的に共演者に自分から声をかけて親睦をはかっていた。

相手役の自分だけではない。

注意してみれば、役者だけではなくスタッフにまでにこやかに対応している。

なるほど、人気があるはずだ。

彼女の周りは常に穏やかだった。

人に“癒し系”という言葉を使うのだとしたら、きっと彼女のような人に使うべきだろう。

—— クランクインして5日目。

晴生はこの日から“咲良”という少女がとても気になるようになった。

「おはよう」

撮影6日目にして初めて晴生は咲良に自分から挨拶をした。
情けない話である。

当の挨拶をされた本人はと言えば、嬉しそうに「おはようございます！」と元気よく返してくれた。

ヘアメイクを終えてすでに役の格好をした咲良はいつもながら可愛らしい。

もしも自分が彼女と同年だったら、TVの中の彼女に夢中になっていただろうな、なんて心の中で苦笑した。

彼は別段、アイドルやタレント、女優などに興味があるほうではなかったけれど、

それでも実際に彼女と接した今はそう思う。

我ながら現金なものだ。

「皆瀬さん、何だか眠そうですね。」

不意に咲良に話しかけられて自らの思考から連れ戻される。

「うーん、そうかな？」

少し目元に笑みを作って彼女の方を向いて答える。

彼女はといえば、少し目を見開いてから一拍おいて、というか一拍遅れてしどろもどろと頷く。

「はい。」

釣り目がちな猫のような大きな目は実は真っ黒ではなく少し薄いグレイがかって見えた。

自然で綺麗な瞳だなと思った。

「何だか意外です。」

皆瀬さんは私の中のイメージでは“何事にも動じない冷静沈着、朝昼晩同じテンションの大人ーな人”っていう感じだったので」

ど真面目にそう言い放つ彼女に噴出してしまふ。

「あはは、どこからそんなイメージを植えつけられたの？

確かに今日は寝不足なんだけど、昨日の晩にまとめ買いしておいた漫画を読み出したら止まらなくなっけかなり夜更かししちゃったからだし、僕はそんなに大人ーな人間じゃないよ。

イメージ崩しちゃってごめんね」

からかうようにそう告げると、よほど驚いたのかただでさえ大きな眼を更に開いて「えー！」と驚愕した。

よほど彼女の中の自分は爽やかな好青年だったのだろう。柄にも無くイメージの中の自分の偽者に力チンとした。

「そんなに驚くなんて、よっぽどがっかりしたの？」

気のないふりを務めてしながらそう尋ねると、咲良は「とんでもない」と首を横に振る。

何だか必死になって取り繕うとしている姿はひどく可愛らしくて、自然と笑みがこぼれてしまった。

もしも歳の離れた妹がいたらこんな感じだろうか。きっとものすごく可愛がってしまうのだろう。

「違うんです。」

何だか皆瀬さんは映画の中とかドラマの中とか、そういう落ち着いた大人の役が多いじゃないですか。

だから、自然とそのイメージがかぶされていたというか……。でも、いま、お話を伺ってとっても身近に感じられたというか。とにかく、どんな皆瀬さんでも私には憧れの役者さんなんですよ！」

誰が見ても慌てた様子で声高に訂正を加える彼女を周囲の人間は微笑ましく見ていた。

きつと咲良自身は必死で、自分が言ったこともいまちピンときていないであろう。

それでも晴生にはそんな頬を真っ赤に染めた彼女がとても可愛く見えた。

「……何というか、ありがとう」

ほわほわと温かい気持ちに包まれて、自然に頬がゆるむ。

きつと彼女に対して向けた初めての本当の微笑だ。

晴生の言葉を聞いて咲良は「えへへ」と照れ笑いをして首を少し傾げる。

「なので、この作品中、ご指導ヨロシクお願いしますね！」

少し悪戯めいた上目遣いで覗き込んできた彼女を、眼を細めて挑戦的に笑む。

「容赦しないよ？」

少し眼を見開いた彼女は一拍遅れて、晴生と同じような挑戦的な笑みを返す。

「望むところです」

きつとこの作品は良いものに仕上がるだろう。

彼は直感的にそう感じた。

彼女の頭に右手を乗せるとそのままクシャクシャと混ぜ返すように撫ぜる。

サラサラと指どおりに良い髪は晴生の指からすると落ちる。

あまりの触り心地の良さにずっとこうしていたいなんて思ってしまった。

「変態か、自分は」と心の中で悪態をつく。

当のされている彼女はといえば、必死に抵抗する。

「ちょ、やめてくださいよ。セット乱れちゃったじゃないですか！
あゝ、ヘアメイクさんに怒られるのあたしなのにー」

頬を膨らましながら少し晴生を睨むと、あまりの迫力の無さに彼が声を上げて笑う。

呆れたように唇を尖らした咲良は、周囲の人間が今まで見たことがないほど歳相応の14歳の少女の顔をしていた。

私、“咲良”はこの作品の出演以来が舞い込んで前からずっと“皆瀬 晴生”のファンだった。

きっかけは何と無しに事務所の社長に誘われていった舞台がきっかけだった。

今から約2年前のことである。

その頃の私はといえばまだ演技といえば台本の台詞を丸覚えすればそれで良いと思っていた。

何せ12歳の小学生だったし、そこそこ人気もあったのも手伝って仕事は努力しなくても舞い込んでできていたので、努力というほどのことはしない。

今思えば、思いあがりも甚だしいと思う。

天狗の私が連れて行かれた舞台では、最近良く見るようになった役者がいた。

確か、人気シリーズ物のドラマに脇役として出演してから人气が徐々に上がったとかの。

正直おぼろげな記憶しかなかったし、さして興味は惹かれなかった。しかし、その無関心は舞台を見終えた後には、あっけなく打ち崩される。

眼で、声で、仕草で、立ち振る舞いで。男は異彩を放つ。

杭を打ち込むまれたかのように、その眼から放たれる光に吸い込まれた。

腹のそこを満たすような声に、翻弄された。

無意識のうちにその仕草に、立ち振る舞いに眼を奪われる。

初めての経験だった。これが本物の役者というものなのだと、初めて知った。

今まで、自分がいかにこの仕事を適当にこなしてきたかということ
を思い知らされる。

彼はプロだ。

それでは自分はどうか？

言わずもがな、似ても似つかない粗悪品だ。

悔しさを覚えた。少なくともこの仕事に携わってきて、仕事に関し
ては初めて。

この時から咲良は決意した精一杯、全力で仕事に望もうと。

それから一年半後、あの時の俳優“皆瀬 晴生”との共演のチャン
スが飛び込んできた時、咲良は二つ返事でOKを出した。

それこそ、その場に誰もいなかったら飛び上がって喜んでいたであ
ろう。

あれからこつそり彼の舞台や映画を見に行った。出演している作品
は欠かさずにチェックした。

ビデオもとって何度も見直して。

克蘭クインしてもなかなか声をかけることはばかられた。

何せ大ファンだった人物が自分の目の前にいるのだから。

5日目にやっと、勇気を総動員して声をかけることに成功した。

声をかけた私に対して皆瀬さんは素敵な笑顔で応えてくれる。

ドキドキした。

笑顔の貴公子の異名をとる彼にとって、容易いものであったとして
も。

初めて「この人と親しくなりたい」と思った。

今まで周りから小言をいわれるほど淡泊な感情しか持ち合わせてい
なかった咲良がそんな感情を抱くなんて、自分で自分が信じられな
い。

何で、彼は自分の中の“初めて”を的確に引き出すのだろう。

この気持ちに名前がをつけるとしたら、何なのだろうか――。

「なあ、なあ、つてばー」

気の抜けた声色の持ち主は晴生を見かけると、必ずといっていいほどある種の誘いをかけてくる。

それはもう毎度のことで慣れて入るといふものの、今回だけは少しわけが違ふのだ。

何せ、未成年の、それも自分のことを尊敬の念をこめて見つめてくる少女の横でその誘い攻撃は
始まったのだ。そのある種の誘いというのは――。

「なあなあつてば、晴生くん。頼むよ。

かわいい子揃えてるんだつてばー」。

今回の合コンはかなり期待できるんだからさー」。

俺の顔を立てると思ってさあ、ちよつと顔出してくれればいいからさあー」

俳優仲間で晴生とは腐れ縁といつていいほどの仲でもある内村修介は、自他共に認めるチャランポランである。

影では“合コン大好き修介さん”の異名も持ち合わせている。

歳も同じ年で、芸暦もほぼ一緒の晴生には何かとからんでくるのだつた。

合コン大好き of 異名は伊達ではなく、月2〜3は開催しているといふからあきれ果てたものだ。晴生自身も白い目で見ていた。

年齢ゆえに結婚がしたいから出会いを求めているというわけでもなく、ただ純粹に女の子達と騒ぎたい一心ゆえというから更に呆れたものだ。

晴生自身も何度も連れ出されてはつき合わされている。

何度断るうともねじ伏せられて連れて行かれるのがオチだった。

「何度も断るっていつてるだろ。

っていうか、お前は作品に集中しろよ。

その情熱を演技に持っていけよ、万年発情男が。」

晴生が冷たくあしらおうとすると、おいおいと噓泣きをしながら傍に立つ咲良にしなだれかかる。

「ちょっと聞いてよ、さっちゃん！。

晴生ってばひどいのよー。」

女しゃべりでなれなれしくも彼女に訴えかける。

何だかその様子が妙に気に入らなくて彼のシャツの襟元をつかんで離れた。

「咲良ちゃんに余計なことするなよ。

女の子だったらお前は見境無いな！」

当の彼女といえば、きょんとした様子で晴生と修介を見つめていた。

「何言っちゃってんの、晴生ー。咲良なんてあと6年したら土下座してお願いしたいくらいだよ。

俺は、どんなときでもオールマイティーに範囲を広げてるんですー。

「

ふざけた事を抜かす修介に、どうしようもなくむかむかとした。

と言うよりも、自らの中にえもいえぬ煮えくり返るような感情がむくむくと湧き出すのを感じる。

何だ、これはと気付く前に彼女が二人の間に入る。

「も、何を言ってるんですか、2人とも。ほら、早く次の撮りがあるんですから!!」

そう軽く大人2人をいさめると、当の本人は間をすり抜けてセットへと向かっていった。

いさめられた大人の片割れ、修介が苦笑する。彼独特の響く低音が晴生の耳に障った。

「やられたなあ、本当に将来が楽しみだ。晴生にヤキモチ焼かせるなんてなあ」

肩にポンと手を乗せられてそう耳元でボソリと呟かれる。

なおさらムツとして、置かれた手を振り払いながら「そんなんじゃない」と力なく答えた。

「なんであきら叔父さんは分かってくれないの！？
私もう中学二年生なんだよ？
もう少し大人として扱ってくれてもいいじゃない！！」

「子供が何を言っているんだか。
大体そんなことを言ってるうちは子供に決まっているだろう。
だまって大人の言うことを聞いていなさい」

「あきら叔父さんの分からずや、馬鹿っ！！」

「カーッと！ストップストップ！！
違うんだよね、そうじゃないんだよね、咲良ちゃん」

珍しく晴生を咲良、2人だけのシーンでNGがでて周囲の視線がその場に注がれる。

それも一度や二度ではなく、何度も、というのは初めてだった。
特に、言い間違えや台詞が飛んでしまったなどという類のものでは

なく、表現におけるNGがこれほどにも続くのは初めてだ。

「すみません、もう一度お願いします。」

皆瀬さんもすみません、お願いします！」

焦りが咲良の瞳に浮かび始めてきた頃に、監督から声がかかる。

「違うんだよ、咲良ちゃん。」

そうストップをかけて、彼女の方へとやってくる。

「“未来”は思春期の女の子なんだ。君と同じね。

彼女はあきらに自分の感情を理解してもらえないことをもどかしく思っていて、なおかつ自分の意思が通らないことに憤慨している。彼女なりの正義は全て子供の戯言と片付けられてしまうことに憤っているんだ。

彼女はどんなに自分の正義があきらによって片付けられようとも、何度でも持ち出す気にいる。

その不屈の、思春期特有の・・・なんていうのかな、盗んだバイクで走り出しちゃいそうな感じがないんだよねあゝ、君の演技には、さ。」

最後のほうには監督自身の言葉さえこんがらがってしまつと、咲良はさらに困った表情を浮かべた。

そんな2人を見ていて、もどかしく思う。

監督が伝えたいことは何となく晴生にも分かった。

確かに彼女の演技の中には不屈の精神というものは感じられなかった。

むしろ“諦め”が彼女に「馬鹿」という台詞を言わせた風だった。だから彼なりに彼女に伝えてやりたかった。

きっと彼女の中には“諦め”は沢山あって、“諦めない”はほとんど無かったんだろう。

強烈にいじましく、そして健気だが、それは思春期の少女にはあまりにも不自然だった。

「きつとさあ、なんで私の気持ちを分かってくれないの？
なんでこんなこともしてくれないの？」

なんで一番私の近くににいるのに私の気持ちを分かってくれないの？
っていう

“未来”なりの“あきら”に対する甘えなんだと思うんだ、僕は。」

晴生がそう微笑を浮かべて彼女に伝えたと、真ん丸く目を見開いてこちらを見つめてきた。

困った表情はもはや浮かんでおらず、代わりにキョトンと首を傾げる。

「でも、大人扱いされたいんですね？」

理解不能だとしてもいうように眉を八の字にして首をかしげながら、考え込む。

きつと彼女は物分りが良かったから、いや良過ぎたからここまでこの世界で売れてきたのだろう。

「甘えたいけど、大人扱いしてほしいんですね？」

「そう、甘えたいけど、大人扱いして欲しいんだ。」

確認するようにゆっくりとそう言った彼女の言葉に、強調するように監督が繰り返した。

「たとえば」と続ける。

「年上の男の子を好きになつたでしょう。

彼にとつてのストライクゾーンは同じ年くらいの女の子だったとしたら、きっとこう思はずだよな。」

「『私のことも女の子扱いしてよ!』って。」

「それと、おんなじだよ。」

その日の撮影は他のシーンに移され、件のシーンは後日取り直しということに納まった。

その後に何度カリテイクを繰り返した結果、いまの咲良にはどうにもつかめずにいたからだ。

その後の撮りはスムーズに行ったが、彼女自身の中にはモヤモヤとしたものが残る。

監督の言いたいことが咲良にはどうしても理解できなかった。

どうしたって越えられない壁はあるし、無理に背伸びしようとしたところで十代という年齢はどうしたって子供でしかない。

大人扱いなんて絶対にしてもらえないし、別にそれを求めようとも思わない。

いい大人が年下の小娘を大人扱いなんてするわけがないし、それを求めること事態が間違っていると思った。

だからこそ、監督が置き換えた例えは更に彼女を混乱させる。

大人の男性に女性として試してみてもらいたいと思うなんてことを望んだところで絶対に無理な話だと思う。

そう頭では理解していた。

それでも、どうしても飲み込めないものが存在している。

喉の奥にモヤモヤとしたやるせない苦しさを感じた。

飲み込めないものが引っかけたような息苦しさを。

それなら、もしも自分が大人の男性に恋をしてしまうことがあれば、それはどうなってしまうの――。

一つの疑念が心の片隅をよぎる。

彼女は確かに自らの心が傾いていることに気付いていた。

ほんの少し前までただの憧れだったものが、むくむくと違う形に姿を変えようとしているということに。

実際に会うまではただの憧れだった。

素敵な、素晴らしい俳優。

彼の演技に見惚れ、憧れてこれまで役に取り組んできた。

彼のような役者になりたいと思って。

でも、この作品で顔合わせをした瞬間に感じたあの溢れるような喜びは何だったのだろう。

なかなか話しかけられもせず、やっと声をかけた時に見せてくれた笑顔に涙が出そうだった。

言葉に出来ない感情というものを知った。

あんな気持ちになったことはなかった。

あんな感情があるということを知らなかった。

気付きたくなかった――。

意味のない感情だ。

少なくとも今回の役にその感情は1mたりとも必要ない。

ただどうしても納得できなかった。

彼女は恋と言うものをしたことがなかったから。

ただ今まで数多くの役をこなしたり、見てきた限りでは、この感情はもう憧れの領域を完全に超えてしまっている。

なぜなら、もはや自分は彼の演技だけに惹かれているわけではないからだ。

役者としての彼だけではなく、ただの人間としての彼を知りたいと思ってしまう。

この作品を撮り終えた後、彼と切れてしまっなんて想像したくもない。

目が、自然と彼を追ってしまう。

耳が勝手に彼の声を聞き分ける。

体が知らず知らずに彼の気配を追っている。

これが恋というのでなければ、きっと他の何ものも恋とは呼べないものになってしまうはず。

それでも——いまの咲良には必要のないものだ、と思った。

だから閉じ込めてしまおう。

自分しかまだ知りえないこの感情を。

「咲良」が「皆瀬 晴生」に恋をした、何て笑い話を誰にも知られることのないように。

映画「answer searchers」が撮影に入って少ししたら二学期の中間テストが始まるとは覚悟していたものの、咲良は作品にのめりこんでしまっていたせいか、いつもなら一ヶ月前からその勉強に取り組んでいるはずなのにすっかり失念してしまっていた。

慌てて勉強を始めようにも、もうテスト一週間前をきってしまったものだから、かなり焦る。

撮影前に事前に勉強をしていたものの、それだけで事足りるわけがなかった。

勿論彼女の通う学校はいわゆる公立ではなく、芸能活動がしやすい芸能科というコースではあったが、それでも咲良自身、勉強がおろそかになるのは我慢ならなかった。

演技ができるから勉強は出来なくても良いなどとは思わない。

大人になるということは礼儀や常識だけではなく、勉強も習得しなくてはいつぱしの人間にはなれないと思っていたし、頭の悪いキラクター性にはがぜん惹かれない。

そんなわけもあって撮影現場の合間にテスト勉強をすることにしたのだが、ちょうどいつも勉強を教えてくれている国立でのマネージャーがインフルエンザにかかるという不運に見舞われ、咲良は途方に暮れていた。

仕方がないと自力でやろうと待機席のテーブルに参考書と教科書、ノートを並べる。

担任の教師からはテスト範囲の載せられているプリントとテスト週間中の時間割が届けられていたので、それも広げて眺めてみた。何もこんな時にいろんなことが重ならなくてもなあ。

そっと溜め息を吐き出してペンケースからシャープペンシルを取り

出す。

カチカチとヘッドを押して芯を出そうとするが、なかなか出てきてくれない。

首をかしげてペンを振って中に芯が入っているか確認してみると、何の音もしなかった。

がっかりしてペンケースから芯のケースを取り出す。

取り出そうとした瞬間一気に中の芯がなだれで、あっと思った時にはパラパラともはや落とさせて床に散乱していた。

「やだなあ」

心底がっかりして拾おうと席を離れてしゃがみこむ。
無心に拾っていると、傍から声がかかった。

「派手にぶちまけちゃったね」

苦笑い交じりにかかった声に顔が上げられない。

かなり近い位置にすることが、息遣いで分かる。

一気に顔が熱くなるのを感じた。

涙まで出そう。恥ずかしさが、全身を駆け巡るのが分かった。

「はい」

そう言っ、咲良の手にパラパラと拾ってくれた芯を落とす。

指先が掌に触れて更に体温が上昇している気がした。

堪えきれずにバツと立ち上がると、慌てて「ああありがとございます！！」と噛み噛みでお礼を言った。

その瞬間に力んでしまったせいか、

手の中の芯が何本か折れてしまったような気がしたが、そんなこと全然気にならなかった。

「へえ、現場でも勉強してるのかー。偉いね、咲良ちゃん」

晴生も立ち上がり、彼女の高さに視線を合わせる。

少し昨日とは様子が違う気もしたが、思春期の少女のことだと突っ込まずにいた。

すぐ傍にあるテーブルの上の参考書や教科書を見れば、明らかに今からはじめるところという感じだったので彼女が座っていたであろう椅子の向かいの椅子の背もたれを引いて座った。

テーブルを人差し指でコンコンと叩いて咲良にも座るように促す。勝手に教科書をめくると、久々に見る数式に圧倒的な懐かしさを感じた。

「うわぁー、懐かしいな。」

「咲良ちゃんて中2だったんだね。」

大人っぽいからいつも忘れちゃうけど。」

椅子を引いて席に腰掛けた彼女にそう話しかければ「そんなことないです」とかぶりをふってこたえた。

晴生自身も20代の頃は俳優だけでは生計が成り立たず、家庭教師などのバイトをしていた時期もあったので、勉強に関しては記憶も新しい。

現場に来てまで勉学に励む咲良の姿には好感を覚えたし、普通の女子中学生ではられない彼女に対して少しの同情を覚えた。

何より彼女自身が自分を甘やかさない姿勢はとも見ていて気持ち良い。

「咲良ちゃん、何の教科が苦手なの？」

興味本意に問うと、眉尻を下げて困った顔をした。

「…英語と古典がちょっと苦手です。」

しぶしぶながらという感じで、そう答えると、机の上に教科書を広げる。

「来週テストなんです」と視線を教科書に向けたまま、斜め前に置いてあるプリントの束に手を伸ばした。

がさがさとかのプリントを探しているようだったが、ようやくと見つかったソレを見て、更に頭を抱える。

どうやら説明の載っているプリントを見ても尚、理解出来なかったようで、途方に暮れていた。

「咲良ちゃんて、いつもこんな感じで勉強してるの？」

ふと、向かいに座っている晴生から声がかかる。

あえて意識しないようにしているというのに、わざわざ近くによって来られると、かなり緊張して気が散る。

何せ昨日やっと自覚したばかりなのに、平静を装うのは少し厳しかった。

きつと晴生も自分の様子が少し違うことには気がついているだろう。

大人になれば上手く気持ちをコントロールできるのだろうか。

歯がゆくて仕方がない。

大人みたいに落ち着いた感情になれば良いのに、と思った。

「もしよかったら僕が教えるよ。」

これでも20代の頃は家庭教師もやりながら役者やってたんだよ。」

ふと、そんな申し出に顔をあげて晴生の方を見ればニツコリ微笑ま
れて心臓が高鳴る。

「あ…、今日はちょっとマネージャーがインフルエンザにかかって
しまつて、

いつもはマネージャーが教えてくれてるんです。」

何とかそう返すと、そのまま丁重に断ろうと思った。

が、直ぐに彼は「そっか」と頷くと立ち上がり咲良の横の席に移動
して来る。

驚いて何も言えずにいと、彼女が持つ教科書を手ごと掴むと、も
う一度ニツコリと笑いかけられる。

高鳴るところか、口から心臓が飛び出してきそうなほど咲良は驚い
た。

「じゃあ、マネージャーさんが復帰するまでは僕がみるよ、咲良ち
やんの勉強」

そう言つて空いているもう片方の手で咲良の頭を撫でる。

異常に多いスキンシップに頭が沸騰して湯気でも出てしまうんじや
ないかと思うほどで、咲良にはもう頷くしか選択は残されていなか
った。

なけなしの力でこれだけはとばかりに「ヨロシクお願いします」と
小さく頭を下げた。

時は昨夜に戻る。

晴生は例のごとく、修介に半強制的に連れられ呑みに行った。

翌日も撮影があるので、晴生としてはあまり行きたくなかったが、いつも断りきれずにその日も同じ流れでそうだった。

特に合コンとかではなく、ただ単に呑みたいだけだったらしい修介は居酒屋ではなく、

自分の部屋に晴生を誘った。

「いやあ、今日も良い仕事したねえ。」などと唸りながら、ビールを缶のまま飲む。

確かに彼は私生活を別にすれば、素晴らしい役者だし、友人としてもまあまあだ。

異性に対しては最低の一言につきるとしても。

「ハルくんさ、相変わらずいいの？」

唐突に問われて、すぐに言われていることの意味がわからなくて答えに詰まる。

一拍おいて言われている意味を理解し、はあと溜め息をつく。

「そんなものいるわけ無いだろ。」

別に欲しくないわけではないが、修介のように合コンなんだといつてまでして欲しいわけではない。

当の修介は彼女が欲しいわけではないらしいのだが。

誰でも良いわけではないし、何より立場的に作るのが難しいのだ。

若手ではないが、そこそこ注目されている今はスクープされる確率が高い。

そんなリスクをおかしてまで欲しいとは思わないのが正直な話だ。

「へえー、別に元カノのこと引きずってるわけじゃないでしょ?」

コンビニで調達してきたツマミの袋を開けながら何気なく問う。

そんな修介にビールを口に使っていた晴生は驚いてグツと喉をつまらせた。

そのままむせて、何度も咳き込む。

「っだよ、それ。」

そんなわけないだろ。

大体いつの話よ、それ。」

晴生がそう返すと、ニヤニヤとただ笑いかけられる。

その笑顔にイラッとした。

「ハルくんさあ、別にそんなまつすぐに頑張らなくてもいいんじゃない?」

適度に仕事して、適度に恋愛したりしちゃってさあ」

早くも二本目のビールを開けて飲み始める。

修介は飲んでも飲まなくても特に変わらない。

そんな彼の体質が晴生は少し羨ましかった。

晴生自身は呑むとテンションも上がるし、酔っ払うこともままある。

20代の時分はそれでよく失敗しては後悔の連続だった。

最近はまだ無茶をしないよう己をセーブしている。

「僕は仕事が今楽しいからそれでいいんだよ。」

まるで取り合おうとしない晴生にじっくりいかないのか、じっと見

つめてくる。

別に嘘を言っているわけではないので、特に気にせずに話しを続けた。

「修さんこそ、本命はいないの？」

あんまり遊んではっかりいると、いつか後ろから刺されるよ。」

皮肉を込めてそう言ってやると、彼は何も気にした様子もなしにうんうんと頷く。

「そうなんだよなあ。俺ももういい歳だし？」

ちよっと今までのような遊びはなあと思ってたわけ。」

ちよっと意外な言葉に驚いて目をまん丸して修介を見た。

何せ遊び人そのものと言われる彼からそんなことを聞ける時が来ようとは思ってもみなかったからだ。

「えっ、修さんどうしたの、熱でもあるんじゃない!？」

慌てて修介の額に手を当てようとすると、触れる直前に払われる。

「ひつつれいな奴だね！」

そんなこと言っていると、俺が今いいなあと思ってる娘教えてあげないよ。」

しかめっ面のままビールを飲み干す。

真面目になるのかと思いきや、別にそういうわけでは無いらしく、拍子抜けさせられる。

「はああ? そんなの知りたくもねえよ。」

何だよ、熱でもあるのかと思って損したよ。」

「知りたくないって、相手がお前の知ってる娘だとしてもか？」

肩を落として呆れ返っている晴生を横に、意地悪そうに腕を組んだ。

「知ってる娘って。何ならあいつえお順で上げていってやろうか？」

肩をすくめて見せる。

「うーん、あいつえお順ならさ行だなあ」

呑気にそう返すと、アタリメをくわえてニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべる。

さ行と言われて、すぐに浮かばず首を傾げた。

「誰だよ…って、まさか、お前、まさか」

「うん、そのまさかだって言ったらどうする？」

飄々としている修介を横にショート寸前だ。

もし修介の言う『まさか』が晴生の思う『まさか』なら、えらいことだ。

「だっ、おまつ、まさかロリコンか!？」

動揺のあまりに口が上手く回らず、ちゃんとした日本語になっていなかった。

「失礼な奴だねえ。何でロリコンなんだよ。立派な女性じゃないか

「！。」

やれやれとばかりに首を横に振る。

「そりゃ、女の子だけど、でも！」

あまりのことにテーブルの上にあったビールの空き缶を全部倒してしまった。

「ああーあ。何しちゃってんの、ハルくんてば。」

まるで他人事のように晴生の動揺をいさめるかのような口調だ。

「何が…何しちゃってるだ。」

…もう、いい。お前がその気ならこっちにも考えがある。」

その結果が晴生自身による徹底な咲良に対するマークに至ったのだ
った。

何せマネージャーすら不在では彼女を護るガードは完全にがら空き
のようなものだと感じたからだ。

ならば自分が彼女の側にいて目を光らせて置けば良い。

晴生が下した結論はそういうものだった。

「ようするにここに代入する式はー…」

最初のうちこそ戸惑っていた咲良だったが時間が経つにつれ、慣れて来たのかリラックスして勉強に励むた。

多少教わっている人が好きな人だということで緊張はあったが、ソレを入れても晴生の教え方はかなり分かりやすく、いつもの倍のペースではかどる。

時が経つのも忘れて一心不乱に勉強に打ち込んでいると、横から声がかかる。

どうやら晴生の出番らしく、慌てて立ち上がるとこちらにすまなそうな表情を向けて顔の前で両手を合わせた。

「ごめん。終わったらすぐにつき教えるから、ちょっと待ってて」

「そんなこと気にしないでください。」

がんばってくださいね。行ってらっしゃい。」

律義な彼の言葉が何も深い意味は無いとわかっていてもうれしくて、自然に笑みがこぼれる。

そんな咲良の笑顔に應えるように、微笑んで「いってきます」と言った。

その笑顔にまたもや胸がいつぱいになってしまう。

なんだか胸がキュンとするという状態に今まさになってしまっているようで、

思わず胸のあたりに手を当ててしまった。

「お待たせ。…って言っても、次、咲良ちゃんの撮りだったよねえ。」

僕、今日はこれであがりなんだよね。」

「…あ、そうでしたね！きよ、今日はありがとうございました！」
慌てて礼を言っと、いやいやと片手を軽く振る。

「すつごく助かりましたし、分かりやすくって、たくさん進みました。」

とにかく感謝を晴生に伝えたかった。

しかし、当の本人は「うーん」とあごをポリポリと掻きながらうなる。

不思議に思っただ良が首を傾げると、「もしよかつたらなんだけど」と切り出す。

「…もしよかつたらなんだけどね、僕、今日この後は特に何もないんだけど、

咲良ちゃんさえよかつたら勉強みようか？」

ちよつと伺つようにこちらを上目遣いで見ながら晴生はそう申し出る。

何のことがすぐに飲み込めず、答えるのが遅れてしまった。

少しの沈黙を彼は拒否と受け取ったのか、すぐにその提案を取り下げようとした。

「あ、ごめん。押し付けがましかったね。気にしないで…」

晴生が眉尻を少し下げて困ったような表情で片手をヒラヒラと振る。

「あ、ちが、違うんです！」

慌てて咲良が訂正する。

勢い余って少し声が大きかったのか、離れたところにいたスタッフがこちらを振り向いた。

「なんでもありません。」と彼はゆるく微笑んで、スタッフに手を振る。

「あ、ごめんなさい…」

恥ずかしそうに謝ると、「気にしないで」と、咲良の頭を撫でた。

「で？」

続けるように促す。

ただ頭からは手をどけてもらえず、明らかに上がってしまったている脈拍が彼に伝わってしまうのではないかと気が気ではなかった。

「ぜ、全然押し付けがましいなんて思っていないです。

ただちよつと驚いただけで…。

そんな風に言ってもらえてすごくうれしいです。」

「じゃあ」

「でも、ご迷惑じゃないですか？ただでさえお忙しいのに…」

すまなそうな咲良の様子に、ふつと笑みをこぼす。

「全然。咲良ちゃん、優秀だし、素直でめちゃくちゃかわいいから、僕は逆に癒されるよ。

晩飯でも食いがてら、どう？」

明らかな晴生の天然発言に、沸騰したヤカンのように頭から湯気でも出てしまうのではないかと思うほど、全身が熱くなる。

男からすれば、晴生の表情は明らかにかわいい女の子に顔をゆるませている様子にしか見えないが、なにせ顔が整っているためか、異性にとつては甘い微笑みにしか見えない。

咲良にしてみれば、好きな相手にそんな表情で、あんなセリフを言われたのだ。

経験のない衝撃に彼女の頭はショート寸前だった。

返事も出来ずに、口をポカンと開けていると、スタンバイに入れとスタッフが呼びに来た。

「あ…」

ろくに返事もできないまま、晴生を上目遣いにちらりと見上げると、ニツコリと笑って「じゃあ、待ってるね」と、手を振って去って行った。

正直、最初は苦手な年頃の女の子ぐらいにしか思っていなかった。ただ接して行くうちに、そのイメージは払拭されていったが、それでもまさかここまで自分があの少女に興味を抱くようになるとは思わなかった。

本当に最初は修介の毒牙からあのいたいけな、なんの汚れもない少女を守らなければという責任感でしかなかったのに、いつの間にか彼女の笑顔に、はにかんだような表情に、頭の中が侵蝕されるかのごとくいつぱいになる。

何事にも全力で取り組もうとする姿勢は見ていて気持ちが良い。教えていくうちに、ただもうかわいくてかわいくてしょうがなくなつた。

そこまではまだ良かった。

あの晴生が撮りに向かおうと席を離れた時に、「行つてらっしゃい」と微笑んだ彼女に胸を鷲掴みされたかのような衝撃が走って、思わず抱きしめたいという衝動にかられた。

ふと、頭の中にロリコンの文字がよぎる。

違う違うと否定して、きつと彼女に対する気持ちは歳の離れた妹とか、姪っ子に対するようなものだと思自分を納得させる。

実際の妹は愛想もわるく、可愛いげないということは隅においておくとして。

今日はマネージャーが休みということで、咲良は一人で現場に来ていた。

その姿はなんだか健気で、とにかく修介のことがなくても構いなくなるほどで、思わず家庭教師役をかってでた。

生徒としての彼女も素直で勤勉だった。

だから彼女を食事に誘ったのは、かなり衝動的にといっても良い。結構強引に約束を取り付けてしまったかもしれない、それでも晴

生の中に彼女を知りたいという願望が育っていた。

「何をやってんだかな」

一人楽屋でぼそりと呟く。

多分間違はなく、自分は彼女に惹かれている。

それがどんな形の感情なのかはわからないけれど。

出来れば恋でなければ良い。

それなら、自分も咲良も周りの人間も、誰も傷つかずに済むのだから。

一人咲良を待つ楽屋の扉がコンコンとノックされる。

晴生はノックの主が咲良だと思って、努めて優しい声色で「どうぞ」と答えた。

すると、彼の予想に反した人物が扉のすき間から顔をのぞかせる。今のところ、晴生にとって要注意人物である修介がニヤニヤとこちらを見ていた。

「やあやあ、ハルくん。

さつきハルくんのマネージャーさんと廊下ですれ違ってさ、一緒にやからどうしてか聞いたら、まだ楽屋にいるっていうから来ちゃったヨ。」

扉を開けたまま話す修介に呆れながら、溜め息をつく。

「何でもいいけど、中に入ってドア閉めたら？」

「そうそう、実は今日は俺一人じゃないんだな。ささっ、入って入って」

急かすように自らの背後に声をかける。よく見ると彼の後ろには、小さな人物が居心地悪そうにして立っていた。

今度こそ咲良かと思いきや、さっさと楽屋に入って来た修介が前から退いた事によって、

その期待はあえなく砕かれた。

立っていたのは晴生や咲良の出演する映画の中で、晴生の演ずる役の恋人役を演ずる白波翔子だった。

予測の範囲内になかったことに一瞬言葉を失う。

今回の撮影中に彼女と関わる機会は少なくはなかったものの、咲良と一緒にいることが多かったせいか、あまりよく知らない人物だった。

「お疲れ様です。」

彼女はそう言ってニツコリと微笑む。

晴生もただそう返すことしか出来ずにおうむ返しに「お疲れ様です」と言う。

「ハルくんさあ、今からメシいかない？翔子ちゃんも一緒にさあ。」

修介はポンと晴生の肩を叩く。

耳元で小さく「頼むよ」と囁かれる。

「あー、悪いけど先約があつて」

断ろうとすると、修介は「そんなこと言わないでくれよ」と追いつめる。

「内村さん、皆瀬さんが無理そうならまた今度にしましょうよう。」

翔子は鼻にかかったような声で修介にそう提案する。

いや、もしかすると断ろうとしているのかもしれない。

「ええー。そんな悲しいこと言わないでよ。」

ハルくん、先約って、何さー。」

情けない声を出して彼はブーブー文句を言う。

ここで晴生は気がついた。

昨日、修介が言っていた気になる女性のは咲良ではなかったということだ。

さ行はさ行でも、咲良ではなく、白波翔子のことだったのだと。確かに若くはある。

彼女はまだ二十歳だし、晴生や修介から見たら一回りも違うわけだし、彼女のことを言っていたのなら、修介が昨日ロリコンを否定したのは頷けることだ。

なるほどと合点がいつて、安心した。

「悪いけど、今日これから咲良ちゃんの勉強をみてあげる約束をしてるんだ。」

晴生がこたえると、修介は「なんだ」と満面の笑みを浮かべる。

「それなら四人でメシ食べばいいんじゃない。よっし、決まりだ。ハルくん家にみんなで行ってピザとかとって食おう！」

さつさと勝手なことを言つて、修介は扉口に立つ翔子に同意を求める。

「ちょ、何でうち何だよ。勝手に決めんな」

撤回させようと試みると、今度は翔子が「それならOKです。皆瀬さん家に行けるなんて、楽しみー」とだめ押ししてきた。

「あー、えーつと…」

彼女の同意まで受けて、どうにも引つ込みがつかない状態になってしまう。

「まあまあ、俺んちよりハルくん家、断然キレイにしてんじゃん。頼むよー」

両手を合わせて頼み込むと修介は翔子に見えない角度で何度も晴生にウインクしてくる。

そんな様子に怒る気も失せて、大きく溜め息を吐き出す。

「わあかったよ」

呆れた風に投げやりに了承すると、ぱつと明るい笑顔に変わる。

「ありがとう！」

「但し、咲良ちゃんの勉強がメインだからな」

念を押して置くと、修介は何度もうんうんと頷いた。

正直、あまりにも予定外の成り行きに驚きはしたものの、修介が狙っている相手が咲良ではなかったと知って、安堵している自分に気がつく。

それに勢いで咲良を誘ったものの、きちんとしたことを考えてはいなかったのだ、修介と白波翔子が共にいてくれるのは心強かった。

「今日僕は車だけど、修さんは？」

移動方法を決めようとそう問う。

「俺は今日マネージャーの送迎で来たから、ハルくん乗せてよ」

飄々とのたまうと、それに便乗するように翔子まで「実は私もなんですー」とニコニコと晴生に笑いかける。

思っていたよりも凶太い彼女の態度に呆気にとられた。
見た感じは可憐な美人そのものだが、どうやら中身は違うらしい。
それでも、今の晴生にはあまり興味はそそられなかった。

ふと、腕時計を見た。

時刻は午後4時をさしている。

咲良の上がりの時間だ。

何故今日はこんなに皆の上がりが早いかというと、今日は監督の結婚記念日で、

早めに帰って来るよう奥さんに脅されているらしい。

四人全員のスケジュールに穴があいているのも、前日になってその事が告げられたからだった。

ゆえに、この四人が奇跡的に揃ったというわけだ。

しかも、咲良のマネージャーが絶妙なタイミングでインフルエンザにかかって、今日の現場はここの本だけだったので、代理のマネージャーもつくこと無かったからに他ならない。

修介や翔子と雑談しているうちに咲良の上がりの時間が少し過ぎた。うっかりおしゃべりに没頭していると、扉の向こうから控え目なノックが聞こえる。

何となく、ただ返事するだけなのは、気になってしまったので、椅子から腰を上げて晴生自ら扉を開けて出迎える。

扉の向こうには今度は予測通りの相手が立っていた。

急いだのか、咲良の顔は少し赤らんでいる。

もともとの色がとても白いせい、本物の人形のように愛らしかった。

呼吸を整えようとしているのか、片手を上下する胸に当て口を開く。

「お、お疲れ様です。ちょっとだけ撮影が長引いちゃって。」

「別にそんな慌てなくてもよかったのに。大丈夫？」

息を切らせている彼女の荷物を手を差し出してヒョイと奪う。

「あ、そんな、自分で持てます。」

そんなことを言っただけ追いつく彼女を横に、荷物を持ち直すと、中に入っただけ自分の荷物ももう片方の手に持つ。

「悪いけど、修さんと白波さんも一緒にいい？」

あ、その前に僕のウチでもいいかな？」

顔だけ少し中の修介たちに向けると、二人が咲良に小さく手を振って「よろしく」と言った。

「とんでもないです。」

…むしろそんな大人の方ばかりのところに私が行って邪魔じゃないですか？」

恐縮する彼女に、苦笑をもらす。

もともと自分が約束をしていたのは咲良なのに、彼女の方が逆に修介たちに気を使っている。

きつと、それが咲良の性格というか、性分なのだろう。

それでも、何故だか少し晴生は寂しさを感じた。

「何言ってるの。」

さ、それより移動は僕の車でいい？」

気を取り直してそう問いかけると、「皆瀬さんの車に乗れるなんてうれしいです」と、わずかに頬を染めてこちらに笑いかけた。その様子がたまらなくかわいくて、一瞬言葉を失ってしまう。

このまま、直進するとロリコンにまっしぐらだとは気づいているが、

勝手に揺らぐ心の模様に自分自身も辟易した。

「そんなうれしいことを言ってくれる咲良ちゃんには、特別助手席に乗ることを許可しよう。」

何が特別なんだろう。

自分がただ彼女に隣に座って欲しかっただけじゃないのか？

言ってしまったから、ものすごく後悔した。

それでも彼女はそんな晴生の言葉にパアッと輝く笑顔で「ホントにいいんですか！？うれしいです！」と明るい声をはずませた。

すぐくうれしかったのはむしろ自分の方だと彼女に言ってしまったいい気持ちにかられる。

懸命にその感情を抑えてニッコリと笑顔を作ると「さあ、行こっか」と、先にすたすたと歩いて楽屋を出た。

すぐ後ろを咲良が少し早足でついて来る。

「ちょっと待ってよ、ハルくん。

俺らのこと忘れてない？」

不満げに追いついてきた修介が、晴生の肩に手をかけて文句を言った。

特に気にとめる事もなくそのまま歩きながら「忘れてないけど、今日は咲良ちゃん優先だから」と答えて、彼女に同意を求めるようにニコツと笑いかける。

突然の振りに戸惑ったのか、「えっ」と驚いた表情でこちらを見上げる。

その様子が無性にかわいくて頬がゆるんだ。

横にから小声で修介が「ハルくん、鼻の下伸びてんよ」と注意されて、わざとらしい真顔を作るほどだった。

スタジオの地下にある駐車場に着くと、先程まで黙ってついてきていた翔子がスッと晴生の横に出てきて尋ねる。

「皆瀬さんて、車、何に乗ってるんですかあ？」

少し鼻にかかるような甘ったる声に、氣をとられた。彼女なりに氣を効かせたのか、咲良が晴生と翔子から一步離れる。そんな彼女の反応が氣に入らなくて、ムツとした。

「別に、普通の国産車だよ。」

愛想もなくこたえと、さらに食い下がる。

「私、車好きなんでえ、楽しみですー。」

ニコニコとしながら、さらに晴生の方に身を寄せた。

「ああ、そう」

素っ気なく相づちを打ちつつも、後ろにいる咲良が氣になってしょうがなかった。

それを見ていた修介が阻止のためか、はたまた晴生を助けるためかは分からないが、間に入る。

「ちょっとちょっと、翔子ちゃん。車好きなら、今度俺の車でドライブ行こうよー」

修介の誘いに、一瞬翔子はうつとうし気に表情をゆがめた。
ほんの一瞬だったので、いまいち確かかは見分けはつかない。

「うーん、うちの事務所うるさいからぁー」と、言葉を濁す。

そうこうしているうちに、車までついたので、

「咲良ちゃん」と名前を呼んで、目配せをすると、彼女は照れたような笑顔をこちらに向けて頷く。

助手席のドアを開けようとすると、翔子が不服そうに晴生をジッと見た。

素知らぬ振りをして運転席に乗り込むと、不承不承という様子で後部座席に乗り込んだ翔子が

「今度は是非助手席に乗りたくないなぁ」と甘えた声で訴える。

彼女の明らかに修介に対するものとは違う態度に、内心イライラした。

何より面倒だと感じる。

修介が気にいっているにもかかわらず、翔子は明らかに晴生にすりよってきた。

別にその事で腹をたてたりするような男ではないが、それにしてもあまりに修介が報われないではないか。

イラついた感情を押し殺しつつエンジンをかける。

助手席をチラリと見ると、咲良がシートベルトに苦戦していた。

「何、締まらない?」

そう聞きつつ彼女の方に身を乗り出して確認する。

見てみると、どうやらベルトがねじれていたようで、咲良の手からはずしてしめてやった。

「あ、ありがとうございます…」

しめてすぐに耳元でそう言われて、ふと顔を上げる。

直後に自分たちが今いかに至近距離にいるのかを自覚させられた。いつも以上に大きく見える目も、スツと通る鼻も、小さな唇も、全てが近かった。

「あ、ごめん」

我に帰って急いで離れると思わず謝る。ふるふると小さく首を振って、うつむいて答えた。

「あ、いえ、こちらこそ……」

耳まで赤く染まっているのを目にして、うつかり笑みをこぼす。

「じゃあ、車出しまーす」

気持ちを切り替えるために、出発を告げた。

移動中は修介が和やかな雰囲気を持ち前の明るさとトークで作り出してくれた。

正直、自分と咲良だけだったら、会話に詰まってしまって、きつと気まずい沈黙が続いていたであろうから本当に救われた気がした。

翔子からも咲良からもバランス良く話を聞き出す事の出来る彼なら、俳優以外にも司会業ができそうなほどだ。

約30分ほどかけて、車は晴生の住むオートロックマンションに到着した。

築5年のこの物件は晴生が売れ始めたあたりに所属事務所が見つけて来て、勧められるままに移り住んだものだった。

移り住んだ当初は近代的な造りに戸惑ったが、慣れると使い勝手も

良く、気に入っている。

地下にある駐車場に車を停車させる。

「運転お疲れ様です。上手なんですねー」

後部座席から翔子がさりげなく肩に手をのばして触れた。

「いや、別にそんなことないけど」

あからさまなアタックにたじろいでしまう。

何よりそんな自分を隣にいる咲良に見られなくなかった。

車を降りて駐車場の中央にあるエレベーターを使って晴生の住むフロアーまで一気に上がる。

ワンフロアーに三件ほど部屋があるのだが、引越して来てからもうまる二年経つが片手で足りるほどしか、隣人と顔を合わせたことがない。

恐らく晴生と同様、特殊な職業についているであろうことは想像つく。

「すごくきれいなところに住んでらっしゃるんですね」

部屋のカギを上着のポケットから出そうとしてみると、咲良が感心したような声で言った。

「そう？」

首を傾げながら取り出したカギでカギを開ける。

扉を開いて「どうぞ」と、ニッコリと笑って咲良に中に入るよう促

した。

「お、お邪魔します」

少しひるんだ風体で恐る恐る玄関に入った咲良に続いて修介と翔子が入った。

「えーっ、スツゴイきれいじゃないですかぁ！」

入ったとたんに翔子が歓声上げる。

横で勝手知ったるとばかりに修介が「ハルくんはキレイ好きなんだよ」と、説明まで加えていた。

玄関に入ったまま、上がろうとしない咲良を横に、二人は勝手に中に入っていく。

呆れながらも晴生自身も玄関に入ると、「どうぞ。入ったら？」と咲良を促す。

靴を脱いで咲良の肩にそっと手を添えた。

リビングダイニングに三人を通すと、そこにあるソファに座らせる。

「修さん、適当になんかデリバリーとってよ」

そう頼むと飲み物を取りにキッチンに向かう。

キッチンはずぐ横にあるので、向かうというほどでもないが。

冷蔵庫を見ると、中にはビールばかりが入っていて、咲良に出せそうなものがなかった。

「うーん」と、考え込んでいると、知らぬ間に咲良がキッチンへとやって来ていて、「持って行くの手伝います。」とニッコリ微笑んだ。

「あー、実は咲良ちゃんの飲み物がなくてさ。」

困って正直に申告すると、何てことないように「ぬるめの水がいいです。」

私、あんまりジュースとか飲まないようにしてるので」と、言うてのけた。

「え、いいの？でもなんか味気ないんじゃない？」

心配になって尋ねると、笑顔のまま首を横に振って「全然です」と否定した。

「そっか」

ミネラルウォーターをマグに注いでレンジで少し温めて渡すと、咲良は「ありがとうございます」と、礼を言う。

やっぱり彼女の礼儀正しさは徹底したものだと、感心した。

「じゃあ、咲良ちゃん悪いけどそこにあるグラスを三つ持ってきてもらってもいいかな。」

晴生がそう頼むと、「はい」と、気持ちいい返事をしてグラス三つと自分の飲み物と一緒にトレーに乗せて持ち上げた。

リビングにビールを持って行くと、修介と翔子がそれぞれ「ありがとう」とか、「ありがとうございます」と、バラバラに礼を言う。すっかりくつろいでいる翔子の横に、テーブルにトレーを置いた咲良が座り込む。

晴生は修介の横に座る前に、彼の膝の上にドンと500ml缶の六本ケースを落としてやった。

どうやら思ったよりも威力はあったらしく、「ハルくん、ひでえー」

と、蚊の鳴くような声で訴えてくる。

わざとらしく「悪いね、手が滑った」と悪びれもせずというと、それを見ていた翔子が吹き出して笑った。

「何か意外！。」

皆瀬さんで、もっと物静かな温和なイメージあったから。」

クスクスと笑いながら「ねー」と、咲良に同意を求めると、彼女も一瞬考え込んでから「そうかもしれないです」と神妙な顔つきでこたえる

「ええー、そうかな。」

別に僕、普通の人間だよー。」

咲良からの一言に少なからずショックを受けて、情けない声をあげた。

「そういえば咲良ちゃん送って行くから僕は呑めないや」

ふと、気がついて修介に告げると、横で勉強道具を広げようとしていた咲良がいきなりブンブンと首を横に振った。

「とんでもないです。私、電車で帰れますから。どうぞ気にせず呑んでください。」

「ダメです。そんなこと許しません。」

腕を組んで頑として咲良の提案を受け入れないという意味を全面に出す。

困った顔をして、「大丈夫ですからー」と食い下がったが、晴生は決して折れなかった。

「で、今日何時に帰ればいいかな？親御さんに電話したら？」

勝手に話を進めようとして、そう切り出すと途端咲良の表情が沈む。

「どうした？」

不思議に思っで尋ねると、誤魔化すようにニッコリと笑って「何でもないです」とこたえる。

まるで本当にさっき沈んだように見えたのは気のせいに思えるほどに、何ともない顔をしていた。

「うちの親は仕事で忙しくて夜遅いので、心配ないです。」

でも、一応10時には帰ろうと思います。

…あの、私は本当にタクシーでいいので、皆瀬さん気にせずに吞んでください。」

まさか彼女の申し出通り吞むわけにはいかないの、

「良いんだよ。僕が咲良ちゃん心配なんだから。」と笑いかける。眉尻を下げたまま咲良は納得いかない様子だったが、肩をぽんぽんと叩いて勉強するように促した。

「8時半には送ってくよ。それまで試験勉強しよう」

そうは言ったものの、なかなか修介や翔子が騒ぐせいで気が散った。きつと咲良より教える自分の方が余程気を散らされた気がする。

勉強の途中で我慢出来なくなった晴生は咲良にダイニングのテーブルに移るように提案した。

彼女は特に異論はなかったらしく、二つ返事でOKを出す。

「ええー、皆瀬さんいないと盛り上がんない」

ブーイングを飛ばす翔子を修介がなだめていた。

先にダイニングテーブルに移動していた咲良はテーブルに教科書やノートを広げて覗き込んでいる。

彼女の癖なのか握ったシャーペンシルの後ろを顎にあてていた。どうやら考え込んでいる時に出るようだった。

「じゃあ、続き」

隣の椅子を引き座ると、そう促す。

「あ、はい」

頷いてさっきまで解いていた問題の続きに取りかかる。

時たま、質問をしてくる咲良に丁寧に答えて、基本は見守る役に徹した。

晴生は彼女を見守る自分の心の中に何か芽生えて行くような気がしたが、特に気に留めてしまうことはそれを認めてしまうことになるのでやめた。

「そろそろ送って行くよ。」

さりげなく時計を見ると、8時を回っていたのでそう申し出た。

ハツとしたように教科書に向けていた顔を上げると、「もうそんな時間ですか。」と驚いた表情で晴生をみた。

さつさとテーブルの上に広げた勉強道具を片付け始める。

最後にペンケースに使っていた文房具をしまうと、全部を入れてきたトートバッグに戻る。

「おかげさまで、すーごく進みました。ありがとうございます。」

ニッコリと笑って晴生に礼をする。

恐縮していると、リビングで呑んでいた修介が寄って来た。

「咲良ちゃん、帰るの？」

若干酔いが回っているのか、頬が赤くなっていた。

「あ、はい。」

今日はありがとうございました！」

修介にも慌てて礼を言つと、そんな彼女を見て「かわいいーい」と抱きついた。

酔っ払い然とした修介の行動見た晴生は大慌てで咲良から彼を剥がした。

「何やってるんだよ！馬鹿！」

思わず声を荒げると、「何だよ、冗談じゃん。」と両手を上げて無抵抗のポーズをとる。

当の咲良はと言うと、二人の横でクスクスと笑っていた。

晴生が「え？」という表情を浮かべて彼女を見ると、「別にそんなに必死に守ってくれなくても大丈夫ですよ。」とニコリと笑う。

「そうだよー。俺と咲良ちゃんは仲良しだもんネー。」

へらへらと横から修介がちゃちゃを入れた。
かなりムツとした。いや、苛ついた。

「むしろ咲良ちゃんは晴生に気を付けた方がいいよー。」

咲良の両肩に手を添えてムフフと笑いながら忠告を与えている修介に嫌な予感がした。

「送り狼になられちゃうかもよー！
きやー！！！」

完全に酔っ払いのテンションで咲良に絡んでいたが、何せ晴生としては思い当たらない節が無いとも言いきれない自分に更に焦った。

「そんなことあるわけ無いじゃないですか。
やだなあ、内村さんたら。」

笑いながら返す咲良の信用に更に心をべこべこにされる。
そこに救いの主とばかりに帰り支度をした翔子が現れた。

「皆瀬さん、あたしも帰ります。明日早いので」

この時ばかりは翔子に感謝した。

「向こうは一通り片付けておいたので、大丈夫ですよ」

そう言つて微笑むと 修介に「内村さんも帰りませんか？」と、促した。

正直、意外な発言だったので驚いた。

ただ図々しいだけの女性としか見ていなかったたので。

「あ、ありがとう…」

驚いたせいで礼を言うタイミングが一拍ずれた。

翔子は何て事無いかのように微かに口角をあげて笑うと、さつさと玄関へ行ってしまった。

「翔子ちゃん帰るなら送つて行くよ。」

慌てて修介が後を追いかける。

なんだか意外な態度に、晴生の中の彼女のイメージが少し変わった。咄然としたまま立ちつくしていると、玄関から翔子の「お邪魔しましたー」という声と修介の「じゃーなー」という声が聞こえてくる。ハツとして隣に立つ咲良を見下ろすと、彼女は首を傾げてニツコリと笑う。

つられて晴生も微笑むと、「じゃあ、僕らも行きますか」と出発を告げた。

車の中は来る時とは違い当たり前だが二人きりだった。

一時間強ほどの二人きりの車中は咲良にとってかなりのハードルだ。急接近なここ数日でも心臓が持たなさそうなのに、もうだめ押しのよう。

晴生のマンションに来る時と同じように彼は車の扉を開けて自分を乗せてくれた。

クラクラ目眩が起きそうな事が沢山起きすぎて、正直思考がついていかない。

きっと晴生にとっては何て事無い事なのかも知れないのだけれども。

「明日は撮影ないけど、学校？」

何気ない会話を振ってくれる彼は自分とは違う。
大人なのだ。

「はい。明日は学校です。
久しぶりに一日中。」

彼は「へえ」と愉^{たの}しげに微笑む。

気を使ってくれているんだろうなあ、と思つてへこんだ。

自分の歳がもどかかった。

私がせめてあと五年早く生まれていたら。

彼と違う形の、自分の望む形に近い関係が築けていたかもしれない。
彼に要らぬ気を使わせる事も無かったかもしれない。

「皆瀬さんは明日はお仕事ですか？」

芸が無いとは思ってたけれど、同じ事を彼に聞き返してしまう。
それでも彼は気にも留めず、優しい声色で答えてくれた。

「うん。」

夏にやる舞台の稽古。

よかつたら咲良ちゃんも見に来てよ。」

晴生が舞台をやることを勿論咲良は知っていた。
そして勿論観に行く事も決定事項だ。

「はい！はい！

勿論です！

何回も観に行きますよ。

皆瀬さんの舞台はいつも楽しみにしてるんです。

うざがらないで下さいね？」

間髪入れずに何度も頷いてそう言うってから、伺う様におそろおそろ
彼の方を向いた。
信号待ちで止まっていた晴生はものすごく優しい表情でドキリとする。

「ウザがらない。

むしろうれしいから。何度でも来て。

チケットも沢山あげるから。

咲良ちゃんが観に来てくれるなら、俺も頑張れそう。」

フワリと頭の上に何かが降りる。

気づくのが遅れた。

クシャリとまるでいとおしむ様に咲良の頭を撫でる。

いつもなら子供扱いされたのだと感じる行為が、今はそう感じなか

った。

「い、いえ、ちゃんと買いますから。チケット。」

どぎまぎしながら首を横に振ると、晴生の手は頭から離れていく。スツと離れた瞬間の頭から無くなった重みが、何故だか無性に淋しかった。

気づけば信号は青に変わって、赤の間に少し縮んだ様に思えた二人の距離も再び元に戻っていた。

「いいんだよ。」

ハンドルを持ったまま前方を向いた晴生そう言う。

「チケット、あげるから来てよ。」

なんだかまるで自分が彼の特別になれたこのような感覚に陥る。まさか、そんなはずは無いのだけでも。

「あ、ありがとうございます…」

じゃあ、お言葉に甘えて。」

遠慮がちに彼の方を向いて軽く頭を下げると、「いいえ、どういたしまして。と返って来た。

再び車内に沈黙が起きる。

咲良がどうにかこの状況を打破しようと考えを巡らしてたどり着いた話題は、彼にとっては間違えだった。

「白鳥さんて本当に美人ですね。」

さつきまで一緒にいた二人の話をしようと思った。

「うん」

しかし、晴生はその言葉に対して特に乗り気じゃないのか、気の無い相槌を返す。

でもそれに必死に会話を続けようとしている咲良は気付けなかった。

「懂れちゃいます。」

皆瀬さんと白鳥さんてお似合いですね。」

自分で言っておいて心がズキリと痛む。

本当にそう思うし、事実晴生の横に並べば一枚の絵のようになるだろう。

咲良のそんな言葉に車の中が一気に静まりかえる。

「本当にそう思う？」

さつきまでとは打って変わって低い声色で尋ねられた。

その声はなんだか知らない男の人の様に思えて、少し怖かった。

しどろもどろになりながら、答える。

「あ、えと、はい。お二人共大人だし。素敵だし。」

自分で言いながらも何て自虐的なんだろうと、心の中で自らを嘲る。言っていて悲しくなった。

自ら自分の好きな人と他の人をくっ付けようとしているなんて。実際そうなってしまうたら、すっごく悲しいし、苦しいくせに。

「大人って…」。

別にお似合いとか、興味無いけど。

まあ、でも咲良ちゃんから見たら僕はオッサンだもんなあー。」

哀愁を漂わせながらうんうんと頷いているが、目線は進行方向に向いていた。

慌ててぶんぶんと首を横に振って、「違います、違います！」と否定する。

別にそういうつもりで言ったのではない。

「まあまあ、いいよ。

その通りだからさあ。」

笑いながらそう告げる晴生の横顔は、よく表情が読み取れないが怒っている風ではなかった。

けれど、はつきりと線を引かれた気がした。

ずっしりと気持ちが重くなる。

元はと言えば自分から振った話題だが。

着実に見たことのある街並みに車は入って行く。

気が付けば大した会話もしないうちに咲良の自宅まであと少しになっていた。

少し沈黙になっていた車内に再び晴生の声が響く。

「近くなつて来たけど、ナビ良い？」

突然に尋ねられて弾かれた様に彼の方を向いた。
一瞬遅れて返事する。

「はい！」

意外にポリウームの大きかった咲良の声に彼は「元気良いね。」と

笑った。

晴生からナビを頼まれた所から自宅はさほど離れておらず、五分もしないうちにたどり着く。

もう晴生の車から降りなければならぬなんて、と少し名残惜しかった。

いや、むしろ彼の隣、助手席から降りるのが、名残惜しかったのだ。きつともう二度と彼の隣に、しかも彼と二人きりでの助手席に乗る機会など無いのだから。

咲良の住むマンションは俗に言うオートロックの高層マンションで、セキュリティも万全だ。

「お疲れのところ送っていただき、ありがとうございました。」

丁寧に礼を述べると、晴生はいやいやと片手を軽く振る。

「別に大した事じゃ無いし、僕が勝手にしたかっただけだから。」

何気ない彼の気遣いに、胸がキュウと締め付けられる。

多分、晴生は何とも思っただけで、何の気なしに言っているのだとは分かっているが、

それでも勘違いをしたくなってしまう。

「そうだ、咲良ちゃん。」

携帯の番号とアドレス教えておくから、気が向いたらメールでもして。」

マンション沿いに車を横付けすると、彼は携帯電話を取り出してそう言った。

驚いて目をまん丸くして彼を見た。

「嫌、だった？」

そんな咲良の様子に彼は恐る恐る伺う様に問う。

「えっ！いいえ、全然！」

慌てて携帯電話を取り出すと、晴生は「じゃあ、こっちから赤外線送るね。受信して。」と、携帯電話を操作する。

咲良は携帯を構えると、彼が送信した内容をすぐに受信した。

「あ、来ました。」

「そっか。」

じゃあ、玄関まで送るから、降りて。」

素早く携帯をしまい込むと、そう促す。

「えっ、いいですよ。」

慌てて申し出を断ると、聞き耳も持たずさっさとドアを開けて降りてしまう。

仕方がないので追いかける様にして車から降りると、ハザードの点滅が妙に明るく感じられた。

「さ、行こう。」

晴生が先に歩き始めてしまったので、追いかける様に咲良も後に従った。

すぐにマンションの玄関まで来てしまうと、「じゃあ、またね。」

と笑って軽く手を振った。

「あ……」

彼女が鍵を探す為にカバンを覗き込んでいる間に、晴生はまた来た道を戻って行ってしまふ。

顔を上げて彼を見た時には既に後ろ姿だった。

「ありがとうございました。」

背中に向かって礼を言つと、顔だけ振り返ってニッと笑いながら手をヒラヒラとさせる。

だが、すぐに前を向くと、もう振り返る事無く去って行ってしまった。

咲良は彼の姿が見えなくなってもなお、呆然と彼の去って行った方向を見つめていた。

マンションに帰ってから、咲良はずっと自室のベッドの上でゴロゴロと転がりながら自分の携帯電話の画面とにらめっこを続けていた。

見つめる画面には、赤外線で送られて来た晴生のアドレスが映し出されている。

赤外線で送られたという事は、メールアドレスだけではなく、電話番号も、という事だ。

彼は、気が向いたらメールして、と言っていた。

気が向いたらって、何？と、頭を抱える。

気など、わざわざ向かせなくても、始終彼に向きっぱなしだ。

でも、だからこそ気軽にメールなんて打てない。

きっと、メールを送ろうと思いついたとしても、文章を考えて修正して、また確認しての作業を繰り返しているうちに、内容が古くなってしまう。

例えどんな内容であったとしても。

ようするに、勇気が無いのだ。

にらめっこしていた携帯電話のスライドをしまう。

いつまでもこんな事を続けていても、時間の無駄だ。

バスとベッドから起き上がると、風呂に入る為に寝間着と替えの下着を手にして部屋を出る。

ボタンとドアを閉める音だけが、家の中に響いた。

咲良の両親は二人共忙しい人で、帰るのはとても遅い。

週の半分は絶対にこのマンションに帰って来ることは無いし、帰ってもパソコンと向かい合っている。

勿論、咲良が話しかければ迷惑がらずに手を止めて、こちらを向いてくれるが。

寂しく無いわけではないが、二人にやりたい事を我慢させてまで一

緒にいてもらうのは咲良としても抵抗がある。

物わかりの良い子だと、両親には喜ばれたからこれはこれでいいのだと思っている。

バスルームに向かう前に家電の留守録を確認しようとリビングの明かりをつけた。

留守録は点滅しておらず、そのまま明かりを消して立ち去ろうとした咲良はローテーブルの上に朝出る時には無かった紙が乗っているのに気がつく。

近寄って見てみると、それは母からの置き手紙だった。

『咲良へ

ママは今日から急遽出張でイタリアです。

多分、帰りは1週間後の水曜日になると思います。

パパは週末まで帰れそうにないみたい。

戸締まりをきちんとして、お留守番してて下さい。

そうそう映画の撮影も頑張つてネ。

また現地に着いたら携帯にメールします。

ママより
『

どうやら、昼間に一度戻って荷物を準備してから出立たらしい。いつも母はこういう時、置き手紙を置いて出掛ける。

決して咲良の携帯電話に電話するとか、メールをするとか、留守電にメッセージを入れておく、という事はしない。必ず置き手紙なのだ。

一見古風に見える彼女のこの習慣は、咲良にとっては少し淋しさを覚える。

いつも知らないうちに、しかも咲良にはすぐには分からない仕方、母は旅立って行くから。

旅立ってしまった後に置き手紙を読む側としては、僅かながらポツカリと心に穴が開いた様な感覚に捕らわれる。

仕事を始めたのは7歳の時で、それまでは習い事に通ったりする事はあったが、それ以外は家でひたすら一人だった。

勿論、ハウスキーパーが入ったりはするが、彼女達だって就業時間が終われば家に帰って行く。

だから、いつだって咲良は一人だった。

その孤独に耐えられないわけでは無かったから、何も言わなかったけれども。

仕事を始めたら両親と顔を合わせる機械は更に減ったけれど、かわりに孤独が押し寄せる事も減った。

だから、咲良にとってこの仕事は好きな事が出来るという事は勿論、別の意味でも大切なものなのだ。

小さく溜め息を吐きながらローテーブルの上の母の置き手紙にもう一度目を通すと、クシャクシャとそれを丸めてゴミ箱に放り込んだ。いつからか、その行動は習慣になっている。

昼間に来ていたであろうハウスキーパーが空にして行ったゴミ箱に音も無く手紙は吸い込まれていった。

余計な事を考えないで、さっさとお風呂に入ってさっぱりしよう。

翌日は一日中学校で過ごす予定だった。

久々に授業に全て出られると、朝から張り切っていたのだが、頭の中で晴生の事がどこかひっかかっていた。

メールを出すように言われていたけれど、結局昨日はお礼のメールすら出せなかった。

多分、メールを送るタイミングとしては昨日が一番良かったはずなのに。

後悔の念に捕らわれてはいたが、だからといって今から送る勇氣も無い。

モヤモヤした思いを胸に今日一日過ごさなければならぬと思うと、やりきれない気持ちに自然と浮かない表情になった。

「咲良あ。」

咲良の前席の坂田 麻結が突然話しかける。

彼女とは一年の時からずっと同じクラスで、咲良にとって唯一とも言える友人だ。

麻結自身も芸能人であるアイドルユニットに属している。

ユニットのイメージに反して彼女の性格は竹を割ったような分かりやすいものだ。

そんな彼女と一緒に過ごすのは、すごく楽な気持ちになれる。

麻結の様な存在は、咲良にとってとても貴重だった。

「浮かない顔、してんね。」

無表情に彼女の方を向くと、麻結は人の頬を人差し指でグイグイとつつく。

「やだ、やめてよ。」

別にそんなこと無いってば。」

彼女の指を避ける様に顔を反らせば、何が可笑しいのか、麻結はフツと笑う。

「何が可笑しいの、麻結。」

いきなり訳も解らず笑われて、咲良はムツとして彼女を軽く睨んだ。

「だって、あんたつてば、チョー悩まし気ーな顔してんだもん。
笑っちゃうー。」

クスクスと笑いながら告げる麻結は、甘い顔立ちからは想像つかないくらい辛辣な舌を持つ。

きっと彼女のファンが聞いたら、卒倒してしまうだろう。

咲良にはとてもではないけれど、彼女に対抗出来る舌を持ち合わせていないから、いつも打ち負かされるのだ。

それでも毎度ながら抵抗してみる。

「悩まし気なんかじゃないわよ。」

「ふーん？」

何度も頷きながらもニヤニヤと微笑する。

「……………皆瀬 晴生？」

まるで心の中を覗き見たかのように、核心を突いた。

勿論、彼女は咲良が晴生のファンである事も、今映画で晴生と共演している事も知っているのだが。

「な、な、な、な！」

麻結の発言に驚愕のあまり、言つべき言葉も見つからず「な」を繰

り返ししてしまった。

「ず・ぼ・し。」

まるで語尾にハートマークでも付いていそうな口調に、ただただ咲良は目を見開いて恐ろしいモノでも見るかのように麻結を凝視した。

「なーんで分かるかってー？

分からないわけ無いっしょー。

あんた、すぐ顔に出るのに。

しかも近頃あんたつてば口を開けば、皆瀬さん、皆瀬さんてうるさいしー？」

アハハと爽やかな笑顔を見せる彼女は、見た目はともかくも、中身は完璧に悪党だ。

「で、何があつた？」

全然女性らしく無い口調は、普段テレビで見る彼女からは想像つかない程男っぽいのが、何故か似合っている。

ムウと膨れっ面で再度麻結を睨むと、「無駄な抵抗は無し無し。」と、結局は押しきられた。

まずはマナージャーがインフルエンザで、晴生に勉強を見て貰う事になった事を伝えた。

それを聞いて麻結は爛々と目を輝かせながら、何度も頷く。

「昨日：撮りが終わって、皆瀬さんが勉強の続き教えるから、うちにおいでよって言うてくれて…」

そこまで話すと、麻結は血相を変えて食いついてきた。

「何それ何それ!!!」

勉強の教えるからうちにおいでって!

何の勉強だっつの!

ってか、うちにおいでって、咲良、超脈ありじゃん。」

麻結のあまりにぶっ飛んだ発言に、咲良の方が慌てる。

「なっ、バカ言わないでよ。」

そんなわけ無いじゃん。

相手は一回り以上離れてるんだよ?」

咲良の主張が終わるのとほぼ同時に予鈴が鳴った。

「ほら、予鈴鳴ったよ。」

次、移動じゃん。

行こ!」

ごまかす様に咲良は話題を変える。

「……まあ、そうね。」

移動しながらでも、話は出来るし?」

口角を上げて麻結は悪そうな顔で笑った。

そんな彼女を見て、咲良は観念しなければならぬ事を悟ったのだ。

放課後、迎えの車に向かう道すがらメールの件まで洗いざらい話させられた。

故に、咲良はげんなりと肩の力を落としている。

「へー、へー、へー！！」

で、あんたメール送ったの？」

横を歩く麻結が悩みの核心を突いてくる。

大概の事に容赦しないのが、彼女のスタイルというか、性格だ。

「…して、ない。」

うつむいて地面を見つめながらむつつりと口を尖らせ答えると、彼女はすぐに「何それ！」と勢いよく不平を飛ばす。

「勿体無いー！」

すぐにしなうて！

こうして時間が経ってる間に皆瀬さんとの距離も開いてっちゃうヨ
「！」

いきなり前に回られてブンブンと肩を掴まれて揺さぶられ、思いきり頭がガクンガクンと前後する。

「いやいや、ちょっと麻結ってば落ち着いてよ。」

身をよじり、やっとの事でその手を振り切って、彼女の執拗な追及をひとまず停止させた。

喰いついたら放さないあたり、すっぱんより質が悪い。

本人としては悪気は無いのだろうけど、その分余計に面倒臭いのだ。

「咲良、ちよつとケータイ貸して？」

再び隣で歩き出した麻結がいきなりそう言うてきたので、つい「え、うん。」と何も考えずに貸してしまった。

彼女は当たり前のように「ありがと」とニッコリ微笑んで受け取る。スマートで完璧なその笑顔に気圧されて、何故なのか聞くタイミン
グを失った。

黙って自分の携帯電話をいじっている彼女の横顔眺めていたが、やはり気になって尋ねてみる。

「ねえ、麻結つては何してるの？」

そんな咲良をよそに「ちよつとね。」などとキレイに弧を描いた口元を開いて適当な返事をしつつ作業を続けていた。

何をしているのかがかなり気にはなったが、答えてくれる気も無さそうな友に諦めモードに入る。

抵抗しようにも自分の携帯電話は彼女の掌の中にあるので、どうにもなりそうもない。

「はい。終わつたあー。」

返すよー。」

満足気に咲良に携帯電話を差し出す。

あまりにもご機嫌な麻結が少し不気味で厭な予感がした。

「麻結…。」

何したの？」

怖いけれど聞かない訳にもいかないの、恐る恐る尋ねてみた。
麻結の突飛な行動にはいつもヒヤヒヤさせられるばかりで。

大概自分は被害者になるのだ。

ニッコリをにんまりに変えて麻結はこちらをバツと向く。

本能的に何かを察知してゾツとした。

今でさえこんな表情をする彼女は、きっと将来とんでもない悪女になる事間違いないだ。

「んーふふ。

ねえーえ、ケータイのメールの送信ボックス見てみ？」

不気味な笑いを浮かべて、そう促す。

言われるままに送信ボックスを開いた。

一番上に送った覚えの無いメールが一つあって、送信先は…皆瀬晴生となっている。

送信時間はいさつき。明らかに送信者は麻結だ。

ただし、向こうから、つまり晴生から見れば送信者は咲良なのだが。悪い予感はどうやら的中したよう。

思わず立ち止まって食い入る様に携帯電話を見つめた。

急いでそのメールを開いて見れば、中には咲良ならまず送らないような文面が並んでいた。

絶句したままそのメールに目を通す。

To：皆瀬さん

Sub：咲良です。

本文：

こんにちは

メール送るの遅くなっちゃって、ごめんなさい。

昨日はと〜っても楽しかったデス。

勉強も教えてもらえて助かりました。

皆瀬さんのお家にも行けてホントに嬉しかったです

また是非行かせてくださいネ〜。

今日はお仕事でしたよね。

頑張ってください。

また明日、現場で。

咲良

ものすごくくだけているというワケでも無いのだが、自分ならまず送らないであろう女子らしいメールの文面に軽く目眩を覚える。だけれど、まだ自分の事をよく知らない晴生ならばまず咲良の携帯電話で他人が自分にメールを送ってきているなんて、露ほども思わないだろう。

けど、メールでいきなりキャラ変わるなんてちょっと無いと思う。

唇をワナワナさせながら麻結の方を向くと、彼女は誇らし気にニヤリと笑いかけた。

「な、な、何でこんな事するのようー。」

へにやりと泣きそうな顔で抗議するが、全く動じる様子はない。むしろ楽しそうというか、嬉しそうというか。

「あー、やっぱり咲良はカワイイわあー。
最高よ、最高。」

その困りきった表情と来たらツボだわあー。」

全くこちらの抗議など気にかける様子も無く、不穏な事を言っている。

美少女なクセにかなり歪んでいるのだ。

「何それー。」

今回ばかりは本当に困ってるんだよ！」

ブンブンと頬を膨らまして睨み付けるが、やはりこれも効力は無いらしい。

どうしたって麻結には敵わないのだ。

しかしこんなメールを送ってしまったって後の晴生の反応が怖い。

「まあまあ。」

そう怒りなさんなって。

大体、このままアンタの事放置しておいたら、絶対メール送らずに終わってたでしょうが。」

全然、咲良とは反対にダメージなど受けていない様子で麻結は髪をかき上げながら軽くいなす。

「そりゃあ、そうだけどさあ。」

もー、明日現場でどんな顔して会えば良いかわかんないよう。」

溜め息混じりに泣き言を言ってみる。

「だあいじょーぶよー。」

むしろ、あたしの予測じゃあ、は…、皆瀬さんは悪くは思っていないはずよー。」

ムフフと含みのある笑いと共にそう告げる。

「ちよつとは積極的になんなさいよ。」

皆瀬さんの事、ス、キ、なんでしょう？」

わざわざ耳元で囁くと、真っ白いキレイな歯を見せ、ニヤリと意地の悪そうな笑みを浮かべて咲良の背中を軽く押した。

手の中の携帯電話をギュツと握りしめる。

届いて欲しくないけど、きつと届いている。

でも、怖いけれど晴生の反応が見たい気がした。

自分からのメールにどんな反応をしてくれるのか。

さっさと目を通して返信してお仕舞いかもしれないけれど。

でも、きつと自分はそんなメールでも、彼から送られてきたメールなら保存をかけて何度も読み返すだろう。

押し黙ってしまった咲良が心配になったのか、麻結が慰める様に肩をポンと叩く。

「大丈夫。絶対上手く行くから。」

フワリと微笑んだ麻結は自信満々に言う。

キョトンとした表情で咲良が首を傾げると、

意味ありげにウィンクを寄越して「じゃあね」と迎えの車の方へと去って行った。

残された咲良は一人、少しの間放心状態でその場に立ち尽くしていた。

咲良が芸能界に入ったのは、子役にしては早くはない10歳、小学校五年生の頃だった。

当時から両親共に今と同じ様に仕事で留守にしがちで、毎日ハウスキーパーやシッターが入っていた。

ハウスキーパーやシッターもずっと同じ人というよりは入れ替わり立ち替わりという感じで、咲良はこれといって思い入れがある人はいない。

そんな環境が当たり前だったから寂しさを感じる事はとうに無くなっていたけれど、それでも一人の家は静か過ぎる。

母は年に数回、咲良を連れて子供向けの舞台に連れて行ってくれた。それが彼女なりの罪滅ぼしのつもりだったのだろう。

それでもその舞台は衝撃的な程咲良を引き込んで、夢中にさせた。それはそれはその舞台を見た週はその事ばかり考えて何も手がつかない程に。

母とのその習慣は咲良の世界を変える鍵だったのかもしれない。

9歳の時に見た舞台がきっかけだった。

その時珍しく母は子供向けの舞台ではなく、大人の見る一般的な舞台に連れて行ってくれた。

正直なところ内容は難しくて全然覚えていない。

けれど、その舞台は確かな衝撃を自分に与えた。

自分もそこに立ちたいと思って、母にせがんだ。

母はそんな咲良の初めてのワガママに笑顔で応えてくれた。

もしかしたら咲良のワガママは咲良自身も何かを始める事によって手がかかる事が無くなるという

利点がある分、忙しい母にとっては好都合だったのかもしれない。けれど、そんな事どうでも良かった。

夢中になっていたから、そんな事気にならなかった。

けれど、母にせがんですぐに入れてもらったプロダクションは咲良に演技指導をしてくれはしなかった。

むしろ入って直ぐに容姿を買われキッズモデルとして売り出されたのだ。

それから少しずつでも順調に仕事が増えていって、気付けばCMや雑誌の仕事が主になって。

10歳から始めた仕事は順調過ぎるくらいに順調で、仕事を貰うようになって一年が過ぎる頃には咲良は売れっ子モデルになっていた。生来の真面目さと生まれ持った容姿がそうさせたのだ。

それと同時に彼女自身の諦めのよさが手伝って、決して入ってくる仕事に文句は一切言わなかった事にもある。

本来やりたかった事とは違う事をやり続けた結果、咲良は自分が何をやりたかったのかすら忘れてしまった。

12歳になってからは少しずつ芝居の仕事も入ってくるようになったが、最早その頃には咲良の中に灯ったはずの芝居に対する思いは消えかけており自分で再び燃え立たせる事など考えにも及ばなかった。

当たり前だろう。

まだ幼い少女が一つの事に、それも自分から離れた一つの事に熱い思い燃やし続けるなど無理がある。

だからそれなりに役をこなし、それなりに演じた。

すっかり自分が芝居をやりたかったという思いを忘れて。

それなり、であれば良いと思っていた。だから、晴生の舞台を見た時に愕然とさせられたのだ。

自分がやりたかった事を、自分の憧れた位置に彼はいたから。

その時に感じた激しい動悸は胸を痛いほど打ち付けて。

瞬きすら忘れて見入ってしまった。

例えばその時に感じた思いが恋では無かったとしても、彼と出会ってしまった今や確実に自分は強く焦がれている。

だからこそ、自らの中に葛藤が生まれるのだ。

この焦がれる思いは恋心なんて安っぽい思いならば、自分はなんて俗っぽい人間なのだろう。

彼をそんなふうに見るのはなんだか憚られるのに。

それでも自分は残念な事に晴生に恋をしているのだ。

それはそれはもどかしい程の。

希望はほぼ0%だったとしても、それはそれで良いのだ。

ひっそり心の奥底で自分だけのモノにするのがいい。

小さな事で一喜一憂する特権は、自分だけのものだから。

麻結にばれてはいるものの、それ以上に広まる事など無い。

広まったりしたら困るのは、自分ではなくて晴生なのだ。

だから、この思いは奥底で大切に飼うのだ。

ボンヤリとただ虚ろにそんな事を考えながら咲良は電車に揺られていた。

麻結は送迎だが、自分はいつも電車通学だ。

別に送迎をしてくれる人がいないわけでは無かったが、敢えて咲良はそれを断っている。

勿論、仕事の時はお願いしているが。

学校にはいつも変装とまではいなくても、目立たない格好で通学している。

制服にアレンジは加えないが心無しスカートは長め、髪も一つに縛って洒落気も何も無い金属フレームのだて眼鏡をしている。

役作りの練習として行なっているのだが、初めのうちは気づかれて声をかけられる事も多かった。

けれど最近では気づかれる事もメッキリ減って、ほとんどの場合は疑惑の目は向けられても声をかけられるには至っていない。

多分、訓練の成果なのかもしれない。

学校から家は大体40分くらい。

帰りの電車は同じくらいの学生で混雑している。

幸いにも座席が空いていたので、ソコに腰を下ろす事が出来た。

大概電車の中ではカバンの中にしまつてある文庫本を開いて読んでいる。

本を読むのは得意な方では無いが、後学の為と月に五冊は読むようにしているのだ。

ほとんど有名な文学物ばかりを読んでいる。

太宰治や夏目漱石など。

勿論、外国文学なども読む。

いろんな考え方があってのだから考えの幅を広げられるので、読書は仕事の役にも立つと事務所の社長に勧められた。

確かにそのアドバイスは役に立っているように感じるので、言われた通り読書の習慣を守っている。

ガタンガタンと揺れる車内は読書にはもってこいで、ともすれば乗り過ぎしてしまう事もある。

今読んでいるのは宮沢賢治の銀河鉄道の夜。

度々原稿紛失の為に話が飛んでいる。

不自然な世界に誘われるのだ。

濃い濃い紺色の夜空に銀色の星々が煌めく。

無心に文字を追って行けば車内アナウンスが自分の降りる駅名を告げる。

グイグイと現実を引き戻されて席を立った。

プシューと間の抜けた音と共に扉が開いて咲良はホームに降り立つ。サワサワと緩やかに吹く秋の風が制服のスカートをフワリと揺らした。

ホームの階段を下りようと歩を進めると後ろから声がかかる。

「真山？」

まさしく『真山』とは咲良の名字で、その声にも聞き覚えがあつて咄嗟に呼ばれた方を振り向いた。

振り向いた先には見覚えのある人物が立っている。

ただし、自分の記憶にあるその人とは少し違つてはいたけれど。

自分の知っている人物より、というよりは自分の記憶の中にあるその人より身長がかなり高くなつていて。

「あ…、町田くん？」

ちよつと自信なさげにその人物の名を呼ぶ。

当の彼はニツと齒を見せて懐かしい笑顔を浮かべてうなづく。

「久しぶりだな。」

秋の風が再び吹き付けて、今度はホームに立つ二人の髪を乱して吹き去つて行つた。

爽やかな秋風を身に纏って現れたこの町田なる少年は咲良の小学校時代の同級生だ。

咲良が私立の中学校に入学したのを期に関わりは無くなっていたが。

保育園の時からずっと同じクラスでそこそ仲も良くて、家も近所で。

最後に顔を合わせたのはいつだったか覚えていないが、その頃と比べるとかり身長も伸びてパツと見誰だか分からない程だ。

「町田くん、て…。」

何か気持ちワリイ呼び方だなあ。」

苦笑気味に彼がそう言ったので、咲良も負けじと言い返す。

「自分だつて。」

真山つて言つたじゃない。

前は呼び捨てしてたクセに。」

小学校高学年になり思春期を迎えて、周りの男女の中がぎこちなくなる中でも咲良と町田の関係性は変化無くてそれは卒業するまで続いた。

からかわれた事もあつたけれど、気にする事も無く。

「さくらは相変わらずだな。

…元気？」

またもや漏らす苦笑が大人びていて、ヤケに疎外感を感じさせら

れた。

もう見上げる程身長は高く、声だってあの頃と比べると格段に低くて。

きつと自分だって彼から見れば変わっているのかも知れないのだけれど。

「うん。元気だよ。

タカちゃんは？」

町田の事を咲良もずっと『タカちゃん』と呼んでいたから、やっぱりそう呼ばうとあえて口に出して言った。

「元気。

こないだ高校のスポーツ推薦決まったんだぜ。」

嬉しそうに報告してきた町田の顔を真っ直ぐに見て微笑む。

言われてみて、もうそんな時期だったんだなと思い当たった。

「スゴイね。

タカちゃん、また夢に一步近づいたじゃない。」

まあね、と少し照れ臭そうに口元を歪めると続ける。

「周りの奴らはまだ進路決まって無いからさ、なかなか言いにくくて。

その分、さくらならエスカレーター式だし良いかなと思って大っぴらに報告してみた。

まあ、知ってるヤツは知ってるけど。」

困った様に苦笑する町田を見てクスリと笑いを漏らす。

「何か可笑しいか？」と首を傾げた彼にゆっくりと首を振った。

「うっん。違うの。」

タカちゃんとは相変わらず優しいなあって思っただけ。」

町田は「なんだそりゃ」と、目線を反らして呟いた。

「そういえば莉子にこの間ばったり駅で会ったけど、携帯を水没させちゃっておまえと連絡取れないって言ってたから番号とアドレス教えたぞ。」

莉子というのは咲良や町田と同じクラスだった友人で、彼女も私立の中学校に行った口だった。

勿論皆が別々の学校ではあるのだが。

咲良と町田、そして件の莉子は小学校で同じクラスだった中でも特に仲が良かった。

男女の壁を越えた友情と言うやつであろうか。

確かにここ数ヶ月彼女とは連絡を取っていなかったことに思い当たった。

「そういえば莉子の学校もエスカレーター式だったよね？
女子高だったっけ？」

「お、おー。」

アイツ学校でオネエ様とか言われて慕われてるらしいぞー。
マジ、らしすぎて笑えるよな。」

クックと押し殺した笑いを漏らしながら彼は告げる。

彼の言うとおり、彼女の光景が目には浮かぶようだ。咲良は感じた。その様子を心底迷惑そうに眺めて知る莉子の姿も簡単に想像でき

る。

「フフッ。

やだ、そのまんまじゃない。

確かに莉子はすっかりし過ぎてるし、カッコイイから女子校じゃ女の子にモテそうだね。」

共通の友人の話に花が咲いて、下りたままホームで立ち話をする姿はきつとどこからどう見ても普通の中学生にしか見えない。

何だか久しぶりに素の自分に戻ったような気がしていた。

「だろー。」

一瞬、町田の笑い顔が妙に幼く見えたのは、きつと気のせいじゃないはずだ。

あの頃に戻ったような感覚を感じているのも自分だけじゃないはずで。

「そういえば、タカちゃんは進学先の高校どこに決まったの?」

何気なく尋ねると、「そうそう」と含み笑いを浮かべた町田は「どこだと思う?」と質問に質問で返してきた。

「何それ。こっちが聞いているのに。

うーん、野球が強いところでしょ?」

「もち」

町田は小学校に入る前からずっと野球少年だ。しかもシニアでは全国にもしていたはず。

有名どころの名前を順々に挙げていつてみたものの、彼は首を縦に振る様子は無く「違う」と一蹴されてしまう。

「ええー？分からないよ。」

「もつと身近にあるだろーよ。」

確かもつと分かり易い、そして身近な学校がある。それは最初から思い当たってはいたが、まさかそんなわけは無いと思い候補から外れていた。

彼の呆れたような物言いにまさかとは思いつつも恐る恐る聞いてみる。

「ええー、まさかうちの学校？」

咲良の通う学校の付属高校は確かに甲子園にもよく出場しているほどの強豪校だ。

でもまさか科は違えど、同じ高校になるなど思いもよらなかった。

「うん。まさかのお前のところ。」

愉快そうに笑顔を向けたまま彼は頷く。

部活を引退したからであろう伸びてしまったスポーツ刈りが、自分達の時の経過を感じさせた。

元々色素の薄い少年だったから、茶色い町田の髪はスポーツ刈りにしても野暮ったさを感じさせない雰囲気があったのだけでも、きっと高校生になったらモテるのだろーなどと、ふと感じさせられる。

「そっかぁー。うわー、びっくりした！」

あっけらかんと驚きを言葉に表して見せると「ホントかよ」と漏らす。

「ちなみに莉子の高校も同じ駅だぜ。」

誇らしげに情報をひけらかす彼が可笑しくて思わず噴出してしまった。

「何それ。ここ笑うところじゃないんだけど？」

うんうんと頷きながらも笑うことをやめようとしないう良に呆れたような視線を投げかけながらも、彼自身の口元も少しヒクヒクしていて。

ようやくと笑いを噛み殺した咲良は思いついて進言した。

莉子のデータが飛んだというのなら、もしかしたら莉子自身のアドレスも変わっているのではないのだろうかと思い当たったからだ。「ねえ、タカちゃん。」

莉子のアド変わってた？

変わってたら私にも教えてほしいんだけど。」

「おう、いいよ。」

町田は二つ返事で快諾すると、恐らく制服の胸ポケットにしまっているのだろう携帯電話を取り出そうとする。

慌てて咲良も学生バツクの外ポケットにしまいこんである携帯電話を取り出そうと、そこに手を突っ込んだ。

ほとんど同時に出した携帯電話をつき合わせてみて、互いに一瞬固まってしまう。

何しろ同じ機種と同じ色で、互いにストラップを付けていなかったから。

「何コレー。」

「マネすんなよなー。」

コレもほとんど同時に発した言葉で。

昔から町田と咲良は趣味や好みが似ていたから、仕方がないといえは仕方が無いのだが。

カラーはオフホワイトで、スライド式のその携帯はほとんど機能性重視であり女子っぽいとはいえないが、それを彼女は気に入っていた。

「赤外線でもいいかー？」

「うん。」

無事作業を終えてアドレス帳を見てみれば莉子のそれが入っていたので、改めて町田に礼を言った。

「ありがとうー」

「いいえー」

作業を終えたので携帯電話を再びバックの外ポケットの中にしまい込んだ。

そうこうしている内に再びホームに電車が滑り込んでくる。

電車の扉が開いて人が降りてくると、その波に押されて思わずよろけてバランスを崩した時に、電話がカバンのポケットからすべり落ちたことに気付かなかった。

ただ何かカシヤンと地面に叩きつけられるような音に気づき、拾

い上げたのだが、自分のものとは気付かず反射的に町田のものだと思ってしまったのだ。

「タカちゃん、携帯落としたよ。」

彼も勢いでそれを受け取る。

「あー、サンキュー。」

受け取ってそのままポケットにしまい込む。

到着した電車には思っていたより人が乗っており、降りる乗客もそこそこ多かった。

芸能人の咲良の存在に気がつく者もいるかもしれない。

少なくとも用心するに越したことはないし。もしもバレた時には自分よりも一緒にいる町田に迷惑が及ぶだろうと考えた彼女は彼の制服の袖を引っ張って「とり合えず帰ろう」と促した。

どうせ駅からの帰り道は一緒なのだ。

何もここで見つかることを心配しながら話し込むことも無いじゃないかと。

「悪い。俺、これから整体に寄らなきゃいけないんだわ。」

心底申し訳なさそうに彼は咲良にそう告げると顔の前に片手を掲げて謝る。

「そっか。じゃあ、気をつけてね。」

あっさりと彼女がそう言って引き下がったので、彼もホッと肩をなで下ろして安堵したような表情を浮かべると「おう」と一度頷く。駅の改札で別れた。

町田はサッと片手を上げてすぐに背を向けて去って行ったけれど、何故か咲良はその後ろ姿を少しの間だけ眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8504n/>

Actor Actor

2011年10月7日18時07分発行